

## 第6節 絵画の可能性のある文様をもつ土器について

第E30号堅穴住居跡から絵画の可能性のある文様をもつ土器が出土した。当センターで幾人かに意見を伺ったが、「わからない」という答えが多かった以外に、いくつかの意見を頂戴した。この土器は、数が少ないとされる縄文時代の絵画資料となるものと考え、私見と頂いた意見を紹介し、小さな資料ではあるが、注意を喚起する上でも若干の考察を加えておく。

今、対象としているのは口縁部が欠損した小型の土器である。底径は54mm、残存高は51mmである。器厚は6mmと、他のミニチュア土器に比べれば厚く、器壁は底部からやや内傾しながら直線的に立ち上がる。第E30号堅穴住居跡の第2層から出土しており、同層中から円筒上層d式あるいは、e式土器が出土していることから、この土器の時期も縄文時代中期中頃と見てよいだろう（出土状況は写真を参照）。

描かれている文様であるが、幅1mm弱の非常に細く、浅い沈線によるもので、胴部上半には「人」字様のようなモチーフが2面、2本の縦位による沈線が2面刻まれている。胴下部にはそれよりもやや幅の広い沈線で、まず横位に1本巡らせ、その上に右下がりの斜位沈線が連続する。底面は（どこを上に考えるかにもよるが）菱形状のモチーフの内部に3条の沈線、T字型の沈線が組み合わされた構成や、長短の鍵状の沈線が組み合わされたもの、2条1単位？で2組の曲線状の沈線が描かれている。

この沈線による線刻が何らかの有意なモチーフとして見た場合、何を表現しているのだろうか。

まず、胴部に描かれた線刻については上部の欠損により不明な点が多いが、2対の「人」の字様の線刻は人を表したものと考えられる。その下の連続する斜位の線刻は草原を表したものと考えたが、木道ではないかとの意見も頂いた。2条の縦位線刻については上部が欠損しており不明である。

底面については、いくつか意見を頂いたが、私見としては次のとおりである（図209-4）。右側の菱形状のモチーフと左側のカギ状のモチーフ（それぞれトーン部）、2条1単位？で2組の曲線状のモチーフに分けて見た場合、左下のトーン部が四足獣見える。一方、右側トーン部は菱形状モチーフに横「T」の字が連結し、人あるいは何らかの施設見える。まず、左下のトーン部であるが、四足獣については、長い直線状の沈線が胴、それに連結する短い沈線が尻尾、その下のカギ状、L字状の沈線がそれぞれ四肢を、図面下中央の短くL字状に屈曲する沈線が頸、短い2本の沈線が頭（と角）を表しているものと思われる。

シカは一般にイノシシとともに、縄文時代の主な狩猟活動の対象とされる（西本1991）。しかし、イノシシが縄文時代中期以降に形作られたり、土器の一部に装飾的に加わったりする（福田1998）のに対し、シカのそれは全くないか極めて少ないことはよく知られていることである（佐原・春成1997、東北学院大学民俗OB会編1998など）。

土器に線刻によってシカを表したものは、極少量ではあるが北海道で散見される（佐藤1998）。そのいくつかを参考にしてシカの描かれ方を見ると、函館市石倉貝塚の1例（函館市教委1999：第2分冊第164図5）は右向きの横方向から、角は密な沈線の集合である。あるいは顔が横向きで、体部は斜め前方から描かれたものように見える。もう1例（函館市教委前出第172図1555）がシカであるとすれば、極端にデフォルメされ、横方向から描かれた角は単純な1本の線となっている（佐藤1998）。また、函館市臼尻B遺跡出土土器に描かれたシカは、体部を横向き、顔を正面に向き角を表したもの

である。いずれも体部は横向きとし、角が描かれている。また、線刻ではないが、福地村西山遺跡では土器にシカとされる粘土の貼付が見られるものがあり（青森県教委1991）、これは頭部から体部まで横向きである。縄文時代のシカの表現は、横向きの体部と角の表現に象徴されるのであれば、本資料も体部右側面を表現したものとの見方が可能であろう。

右側の菱形モチーフは何を表したものだろうか。横T字のモチーフは、矢を番えているように見える。縄文時代の人々が人間をどのように線刻表現するか、その資料がほとんどない現状にあるものの、この時期のこの地域の土偶（人間そのものを表現しているかどうかは別として、少なくともモデルは人間から発生していることは疑う余地がない）は、全てに二脚表現があるわけではないが、頭部や両腕は明確に表現しており、線刻とはいえもう少し具象化されてもよいようにも感じる。シカの頭部や毛皮を被るといった北方狩猟民の民族誌事例（加藤1986）やマタギの狩装束も紹介されたりもしている（森谷1995など）が、当時の狩り装束があるとすれば、一体どのようなものであったのだろうか。

あるいは別なものを表しているのだろうか。シカの捕獲方法については、考古学的な遺構・遺物から見て、弓矢による狩猟、陷阱などが考えられる。しかし、前者を取ってみても矢毒や仕掛け弓の存在などが指摘され（大泰司1994）、アイヌ社会では広く認められながら（萱野1978、栃木県立博物館1989など）、具体的にはなかなか明らかにしにくいものもある。同様に罠についても、近年盛んに生態人類学的なアプローチが試みられており、シカも罠の対象となっている（田口1998）ことがわかるが、考古学的な検証は難しい。罠と言っても「オシ」や「オソ」と呼ばれる吊り天井式や「コブチ」と呼ばれる結蹄式などがあり、小型動物だけではなく中・大型動物も対象になり、追い込み猟の一種として、網猟も中国大陆や沖縄にある（千葉1975）。あるいは陷阱についても、Tピットとも呼ばれる溝状土坑の捕獲対象が主にシカだったことも示唆されたりもする（福田1989）が、狩猟法に多様性があったことを示しているものと言える。

他に頂いた意見としては、底面全体としてとらえて、ツル（図209-2）あるいは何らかの鳥類、図右側の菱形モチーフからムササビ（図209-3）といった意見を頂いた。

ツルは遺跡からの出土量はそれほど多くはないようで、時期が縄文時代前期中頃で異なるものの、北側に隣接する国特別史跡三内丸山遺跡ではツル類が若干出土しているに過ぎず（西本1998）、狩猟の本来的な対象とならなかったものと思われる。ただし、ツル自体が特別視されていた可能性も指摘されて（金子1994）おり、線刻（印す）の対象となったことも考えられる。

ムササビについては、先述の三内丸山遺跡から哺乳類ではウサギに次いで多出した。食料資源としてのムササビの有用性については明らかではないが、少なくとも秋田県において大正末期から昭和初期には毛皮が重要な輸出品となっていたことが知られている（青森県自然保護課1987）。もちろん、民俗事例の安易な援用はさけるべき（佐藤1989）であるが、その毛皮の有用性を物語っていよう。

左端の2条単位で垂れ下がるように引かれた沈線はよく解釈できないが、木の枝やあるいは滝？などが考えられるのかもしれない。いずれにしても本資料は、シカ（あるいは一般的な狩猟対象獣）やムササビの狩猟成功を願うことに関連する遺物であると考える。縄文時代前期の自然遺物が多量に出土した三内丸山遺跡では、シカの占める割合は低い。中期に入ってその状況がどれほど変化したか不明な点も多い。時代は降るが『万葉集』や『延喜式』の中でも、シカの肉以外にも角や皮などが広く

利用されているよう（梶島2002）で、縄文時代にあっても重要な獸であったことは想像に難くない。その意味において、本資料は当時の近野遺跡や三内丸山遺跡近隣の人々の動物観、宇宙観を表したものと言えるだろう。

このような資料は、よほど具体的でない限り、線刻（あるいは絵画）の解釈には主觀が入ることは承知している。そもそも万人が納得できる考えなど無理なことなのかもしれない。これまで述べてきたのも、その可能性の中の一つに過ぎない。より多くの方々のご意見を頂きたく、また、絵画資料が少ない縄文時代において、資料の提示の意味も込めて述べたつもりである。個々人の考え方方が可能性の一つに埋没してしまいかねないこともあり得るが、より多くの意見が出されることが肝要だと思うのである。最近、この種の資料の真贋が取りざたされる（春成2003）。発掘調査で出土したからフェイクではないというつもりはないが、出土状況の写真を掲げておいた。

（小笠原）

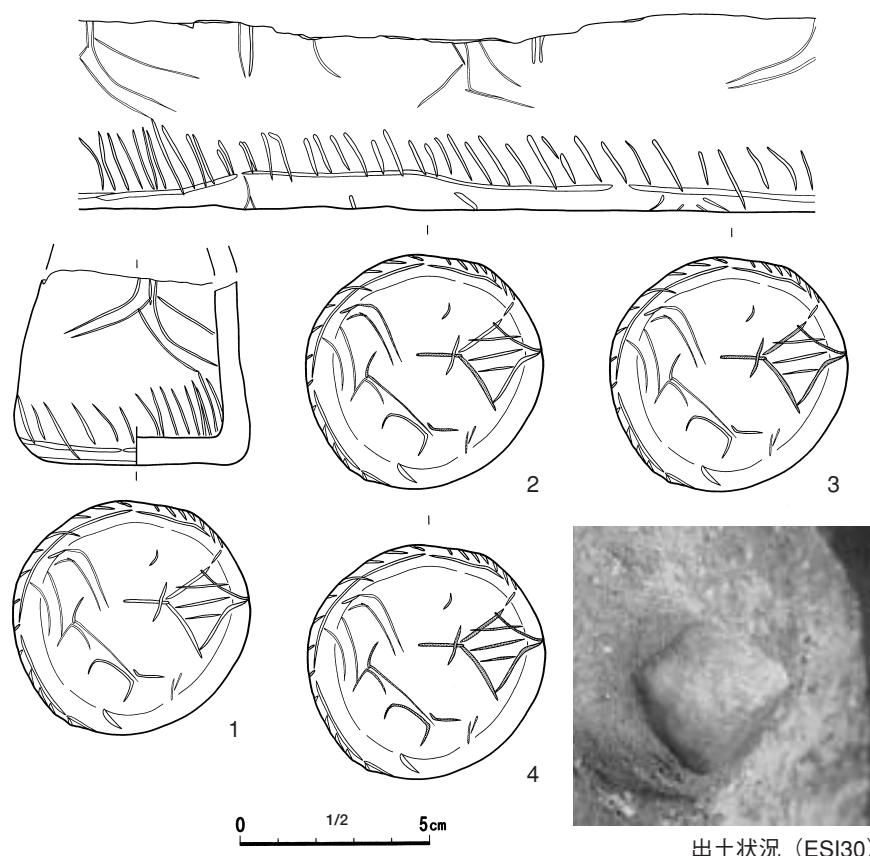


図209 線刻のある土器

## 第7節 平安時代の遺構

### 1 壁穴住居跡

今回報告分のE区では平安時代の壁穴住居跡26軒が検出された。拡張前後の壁穴住居跡を合わせると36軒にのぼる。ここでは、本報告分の調査成果を中心に遺構のまとめを行うが、過去の調査例も加味しながら、行うものとする。

#### （1）柱穴配置

今回報告の36軒の壁穴住居跡は、主柱穴・柱穴の有無・配置から分類を試みた（図210）。

主柱穴 I 柱穴を持たないもの II 主柱穴を持たないもの

III カマドの構築される壁面に接して2本の主柱穴とこれに対応する2本の柱穴の配置

IV 4本の主柱穴が壁に接しないでほぼ正方形に配置される。

#### 柱穴配置分類

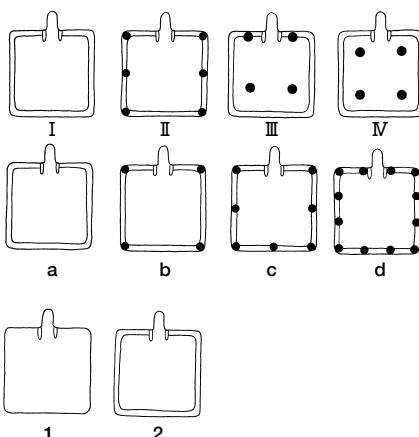


図210

壁柱穴 a 壁柱穴を持たないもの b 壁柱穴が住居跡の四隅に位置するもの

c 壁柱穴が住居跡の四隅とその中間に1本位置するもの

d 壁柱穴が住居跡の四隅とその中間に2本位置するもの

壁溝 1 壁溝を持たないもの 2 壁溝をもつもの

以上の分類からみると、

I主柱穴を持たないもの13軒（I a 1類5軒、I a 2類1軒、II b 2類7軒）

III類15軒（III a 1類1軒、III a 2類5軒、III b 2類2軒、III c 2類4軒、III d 2類3軒）

IV類（IV a 2類1軒、IV b 2類1軒、IV d 2類1軒）

IIまたはIII類のものとIIIまたはIV類のもの合わせて5軒である。本遺跡で、多く確認される柱穴配置はIII類で、過去の調査例で確認できた柱穴配置のなかでもこの類がもっとも多い。

#### （2）平面形・規模

平面形は方形・長方形などであり、長方形のものは主軸方向に長辺がくるものと短辺がくるものに分かれる。削平により全体形を把握できなかったものもある。住居跡の規模を図211に示す。規模の不明なものもあるが、最も大きい住居跡はESI26-IIIの6m台であるが、概ね長軸が4~5m、

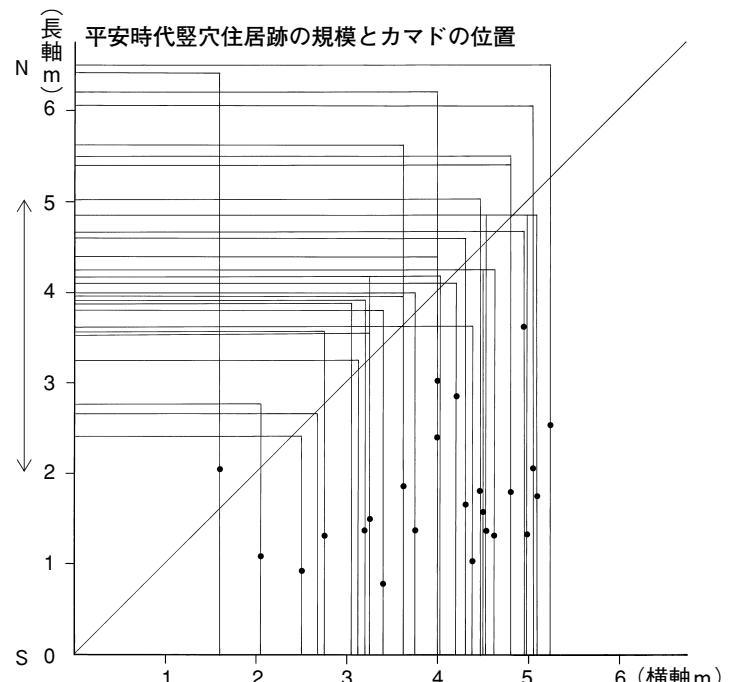


図211